

## 内外交差点

# シーズのみのPFでは無意味に 現場とつなぐ役割を果たしたい

加藤 博和氏 (名古屋大学大学院教授) 第9/12回

11月25日に開催された、国土交通省の「『交通空白』解消・官民連携プラットフォーム」第1回会合にオンラインで出席した。このプラットフォームのアドバイザーを仰せつかったためである。アドバイザー4人は各30秒であいさつするようにとのことだったが、私がしゃべっている途中でこちらのWi-fiが切れてしまい、国交省政務三役や事務方の幹部がご臨席の中、しかもオンライン含め700人余りが視聴する中、痛恨の極みだった。直後に話題提供した平井伸治・鳥取県知事様が「鳥取県は交通空白も大変だが、通信空白も課題だどご理解いただきたい」とおっしゃって笑いを誘ったが、私は笑ってられない。終了後の講演のため、鳥取県三朝町役場にいたのだから。なお、私のあいさつは、「地域公共交通プロデューサーを名乗って全国の現場で取り組み、修羅場も人一倍くぐってきたので、お役に立てることもあるかもしれない。アドバイザーというのは大変おこがましく、自分も現場で実際に取り組んでいるので、皆様にはぜひとも志を同じくする仲間と思っていただき、一緒に頑張っていければと思う」といった程度である。

ところで、プラットフォーム (platform) とは何であろうか。元は高く平たい台を意味し、漢字では「壇」が一番近いと思われる。駅のホームはプラットフォームの略なのだが、フォがホに変わってしまっている。さらにこの言葉は「基盤となる環境」「様々なものを集めた場」という意味で使われる。今回の会合はまさに、駅のホームに様々な列車が着発するように短い発表が続いた。この日に会員募集も始まったが、国が音頭をとっているだけに、様々なメンバーが集うことになっていくのだろう。会合の次第を見た時に予想した通り、話題提供された皆様はしゃべり足りなかったようで、30分以上の延長となった。対面参加者によると、会場内はとても盛り上がっていたとのことである。私自身も会場に行けば壇上であいさつしたはずが、遠く離れた会議室で1人、小さい画面からの参加では臨場感を得られない。しかし、逆のことも言えるだろう。前日に倉吉駅を出て、周辺地域を路線バス

で巡って、バスの乗客だけでなくそもそも道路を走るクルマの台数が少なく、人を見かけることもまれで、開いている店もほ



とんどない田舎の典型的風景、そして倉吉市中心部の白壁土蔵群や三朝温泉でそぞろ歩きする国内外からの観光客を見ながら、「自分はここで何ができるのか」を考えていたのだから、地下鉄駅に直結したタクシーも周辺にたくさんいる霞が関とは別世界である。

三朝温泉はタクシー営業所跡が2カ所あり、現役営業所等はないようである。三朝町は高齢住民に対するタクシー利用助成を行っている。倉吉市中心部から遠くないのでタクシーを呼ぶことはできるが、気軽に使えるわけではないだろう。一方、近くの倉吉市関金地区に行くと、10月から乗合タクシーの実験が始まっているのを偶然見つけた。緑ナンバー車両で、タクシー事業者が運行している。後で詳細を調べてみると、国の共創モデルプロジェクトの支援を得て行われた、地域全体の公共交通体系見直しの一環であり、様々な工夫が見てとれた。しかし大きな変更であり、住民に定着するまでには時間がかかると思われる。この現場から学べることは他の地域にとっても有用となりそうだが、プラットフォームではどのように活用されるのだろうか。

今回の会合は、交通空白の現場と、物理的にだけでなく内容的にもかなり遠いところで行われたように思えた。まるで、列車は次々に発着しているが乗客がいない駅のホームのよう。基本的には「こう思っている」「これができる」というシーズ側あるいは政策側からの話であって、「現場で何が問題であるかは正直どうでもいい」というか、「そこに自分たちの責任はない」というニュアンスを強く受けた(否定されるかもしれないが、それは自覚が足りないだけ)。そんなことでは、地域は新たなシーズの導入に期待を持つものの、そのうち適材適所とかけ離れた処方箋に失望するという、地域公共交通の限界でさんざん起きたことがまた繰り返されるのだろうし、それを経て地域はさらに疲弊してしまうのだろう。そうならないよううまく両者をつなぐのがアドバイザーとしての自分の役割なのだろうと思った。そして、この私の思いについてきてくれる交通事業者はどれだけいるだろうか。